

知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

県営畑地帯総合土地改良事業（知名西部地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

大当遺跡
浜須A・B遺跡

1993年3月

鹿児島県大島郡知名町教育委員会

序 文

この報告書は、県営畠地帯総合土地改良事業（知名西部地区）に伴い平成4年度に実施した大当遺跡・浜須A・B遺跡の発掘調査の記録であります。発掘調査は、県教育府文化課並びに県立埋蔵文化財センターのご指導を受けながら知名町教育委員会が調査主体となって実施しました。

その結果、縄文時代後期から弥生時代にかけての土器とともに縄文時代後期から晩期にかけての住居跡や柱穴が発見されました。当時の生活を知る上で貴重な遺跡であり、沖永良部島の縄文時代から弥生時代の研究を進めていく上で貴重な資料であると思います。本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、県教育府文化課・県立埋蔵文化財センター並びに発掘作業員の方々に対して心より感謝の意を表します。

平成5年3月

知名町教育委員会

教育長 保 徳 男

例　　言

1. この報告書は、1993年8月～10月にかけて実施した県営畑地帯総合土地改良事業（知名西部地区）に伴う確認調査の報告書である。
2. 調査は知名町教育委員会が県農政部（沖永良部土地改良出張所）の委託を受け、調査員の派遣を県立埋蔵文化財センターに依頼して実施した。
3. 本書で用いたレベル数値は、県農政部（沖永良部土地改良出張所）が作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は、倉元・児玉が行った。
6. 出土遺物の実測・トレース及び報告書の執筆・編集は、倉元・児玉が行った。
7. 本遺跡出土の遺物は、本教育委員会が保管し活用する。

本文目次

- ◇ 序 文
- ◇ 例 言
- ◇ 報 告 書 抄 錄

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第3章 大当遺跡	7
第1節 調査の概要	7
第2節 各トレンチの調査	7
第4章 浜須A遺跡	9
第1節 調査の概要	9
第2節 各トレンチの調査	11
第5章 浜須B遺跡	12
第1節 調査の概要	12
第2節 各トレンチの調査	14
第6章 まとめ	36

表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表	6
第2表 大当遺跡トレンチ一覧表	7
第3表 浜須A遺跡トレンチ一覧表	9
第4表 浜須B遺跡トレンチ一覧表	14

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	
第2図 周辺遺跡位置図	5
第3図 大当遺跡土層模式図	7
第4図 大当遺跡トレンチ配置図	8
第5図 浜須A遺跡土層模式図	9
第6図 浜須A遺跡トレンチ配置図	10

第7図	浜須B遺跡土層模式図	12
第8図	浜須B遺跡トレンチ配置図及び遺跡範囲図	13
第9図	1・2・6トレンチ遺物出土状況及び土層断面図	15
第10図	7・10・13・14トレンチ遺物出土状況及び土層断面図	16
第11図	6トレンチ出土遺物	18
第12図	6・7トレンチ出土遺物	20
第13図	6・7トレンチ付近表採遺物, 10・13・14・15トレンチ出土遺物	21
第14図	6・7トレンチ付近表採遺物	22
第15図	1号住居跡検出状況	24
第16図	2号住居跡検出状況	25
第17図	4号住居跡検出状況	26
第18図	1号住居跡内出土遺物	27
第19図	2号住居跡内出土遺物(1)	29
第20図	2号住居跡内出土遺物(2)	30
第21図	4号住居跡内出土遺物(1)	31
第22図	4号住居跡内出土遺物(2)	32
第23図	4号住居跡内出土遺物(3)	33
第24図	4号住居跡内出土遺物(4)	34
第25図	4号住居跡・16トレンチ出土遺物	35

図 版 目 次

図版1	大当遺跡近景, 大当遺跡作業風景, 浜須A遺跡近景, 浜須A遺跡5トレンチ, 浜須B遺跡近景, 浜須B遺跡作業風景	38
図版2	6トレンチ遺物出土状況(浜須B), 16トレンチ住居跡検出状況(浜須B), 2号住居跡(浜須B)	39
図版3	4号住居跡(浜須B), 4号住居跡遺物出土状況(浜須B), 4号住居跡遺物出土状況(浜須B)	40
図版4	1号住居跡遺物出土状況(浜須B), 1号住居跡完掘状況(浜須B)	41
図版5	出土遺物(1)	42
図版6	出土遺物(2)	43
図版7	出土遺物(3)	44
図版8	出土遺物(4)	45
図版9	出土遺物(5)	46
図版10	出土遺物(6)	47

報告書抄録

フリガナ	ウートウイセキ ハマスエー・ピーイセキ				
書名	大当遺跡 浜須A・B遺跡				
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業(知名西部地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
卷次					
シリーズ名	知名町埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	7				
編著者名	倉元良文・児玉健一郎				
編集機関	知名町教育委員会				
所在地	〒891-92 鹿児島県大島郡知名町知名307				
発行年月日	1993年3月31日				
フリガナ	ウートウイセキ	ハマスエーイセキ	ハマスピーイセキ		
収集遺跡	大当遺跡	浜須A遺跡	浜須B遺跡		
フリガナ	カゴシマケンオオシマグンチナチョウタミナ				
所在地	鹿児島県大島郡知名町田皆				
調査期間	1992.8.17~10.1				
調査面積	311.1m ²				
調査起因	県営畑地帯総合土地改良事業				
出土 遺物 ・ 遺構 等	主な時代	主な遺構	主な時代	主な遺物	出土量
	縄文時代 (晩期)	住居跡・5基	縄文時代 (後期) (晩期)	〈土器〉 嘉徳式土器 伊波式系土器 面縄西洞式土器 喜念I式土器 〈石器〉 磨製石斧	パンケース 10箱



第1図 遺跡位置図

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下文化課）は、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、各開発機関との間で事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を行っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（農地整備課・沖永良部土地改良出張所）は、知名町知名西部地区内において県営畑地帯総合土地改良事業を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について文化課に照会した。これをうけて平成3年度に実施した分布調査によって大当遺跡・浜須A・B遺跡が確認された。

この結果に基づき、農地整備課・文化課・知名町教育委員会の間で埋蔵文化財の保護と事業の推進に係る協議が行われ、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を実施することになった。

確認調査は知名町教育委員会が調査主体となり実施し、調査期間は平成4年8月17日から10月1日までであった。その後、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて整理・報告書作成事業を行った。

第2節 調査の組織

調査主体	知名町教育委員会	調査責任者	タ	教育長	保徳男
調査事務担当者		タ		社会教育課長	上村健仁
		タ		課長補佐	東雄幸
		タ		派遣社教主事	山元保
		タ		主査	武原吉彦
		タ		庶務係	窪田みゆき
調査担当者	鹿児島県埋蔵文化財センター	文化財主事	タ	倉元良文	
			タ	児玉健一郎	

なお、調査の企画・実施に関しては文化課および県立埋蔵文化財センターの指導助言を得た。

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成4年8月18日から10月1日まで行った。調査の経過については、日誌抄で略述する。

- 8月18日（火） 沖永良部土地改良出張所で発掘調査について打ち合せ。
大当遺跡・浜須A・B遺跡現地確認。
- 19日（水） 大当遺跡に発掘器材を搬入。
大当遺跡発掘調査開始。1～3トレンチ設定、重機で表土除去。包含層は確認されず、マージ及びコーラル面まで重機で掘り下げる。
- 20日（木） 1～3トレンチ壁面清掃。1トレンチ写真撮影。1～3トレンチ土層断面図作成。1トレンチ埋め戻し。
- 21日（金） 2・3トレンチ写真撮影、埋め戻し。大当遺跡調査終了。
- 浜須A遺跡に発掘器材搬入。浜須A遺跡発掘調査開始。1～5トレンチ設定重機で表土除去。1～3トレンチ壁面清掃。
- 24日（月） 1～3トレンチ土層断面図作成。4・5トレンチ掘り下げ。
- 25日（火） 4・5トレンチ掘り下げ。午後降雨のため作業中止。
- 26日（水） 4・5トレンチ掘り下げ。ローリングを受けた土器がそれぞれ1点出土。1～5トレンチ写真撮影。4・5トレンチ土層断面図作成。
浜須A遺跡トレンチ位置図作成。浜須A遺跡発掘調査終了。
- 浜須B遺跡へ発掘器材搬入。発掘調査開始。1～9トレンチ設定。重機で表土を除去。
- 27日（木） 1・2トレンチ掘り下げ。遺物出土。
- 28日（金） 1・2トレンチ掘り下げ。
- 31日（月） 台風接近のため作業中止。
- 9月1日（火） 2トレンチは、水はけ悪く作業中断。1・3トレンチ掘り下げ。
- 2日（水） 1・2・3・4トレンチ掘り下げ。3・4トレンチ清掃、写真撮影。
台風接近のため作業一時中断。
- 7日（月） 6・7トレンチ掘り下げ。遺物出土。
- 8日（火） 6・7トレンチ掘り下げ、遺物出土状況写真撮影、遺物出土状況平板実測。
10～22トレンチ設定。重機により表土除去。
- 9日（水） 6・7トレンチ掘り下げ。遺物出土状況平板実測、写真撮影、遺物取り上げ。さらに掘り下げ。1～9トレンチ位置図作成。5・8・9トレンチ写真撮影。

- 10日（木） 6・7トレンチ掘り下げ。遺物出土状況平板実測、取り上げ。さらに掘り下げ。10~23トレンチ位置図作成。11・12トレンチ写真撮影。
- 11日（金） 6・7トレンチ掘り下げ。遺物出土状況平板実測。15・16トレンチ写真撮影。
- 16日（水） 6・7トレンチ掘り下げ。遺物出土状況平板実測。6・7トレンチ終了。
10・13・16トレンチ掘り下げ。遺物出土。
- 17日（木） 10・13・14・16トレンチ掘り下げ。14トレンチ遺物出土。16トレンチ拡張。
10トレンチ掘り下げ終了。1・2トレンチ遺物出土状況平板実測、土層断面図作成。
- 18日（金） 13・14・15トレンチ掘り下げ。10・13トレンチ遺物出土状況平板実測。6・
7・10・13トレンチ土層断面図作成。1・2・6・7・10・13・14・17~23
トレンチ写真撮影。6・7トレンチ柱穴実測。

21日（月）~25日（金） 都合により1週間作業中断。

- 28日（月） 1・4トレンチ掘り下げ、遺物出土状況写真撮影。15・16トレンチ掘り下げ。
- 29日（火） 15トレンチ掘り下げ。16トレンチ遺構検出。1号・2号・3号住居跡上面ブラン実測。
- 30日（水） 1号・2号住居跡内遺物出土状況写真撮影、実測、取り上げ。
- 10月1日（金） 柱穴検出。4号住居跡検出。遺物出土状況実測、取り上げ。
発掘器材撤収。調査終了。

第2章 遺跡の位置と環境

知名町のある沖永良部島は鹿児島市の南方海上約550kmに位置し、北緯27度線上に浮かぶ島である。島の北東から南西に約20km、最大幅約9kmを測る。地形は、比較的平坦で標高246mの大山を中心とし、その大部分を第四紀琉球層群におおわれたカルスト地形を呈している。知名町の東北は和泊町と接し、南は太平洋を隔てて与論島を望み、北は東シナ海に面している。

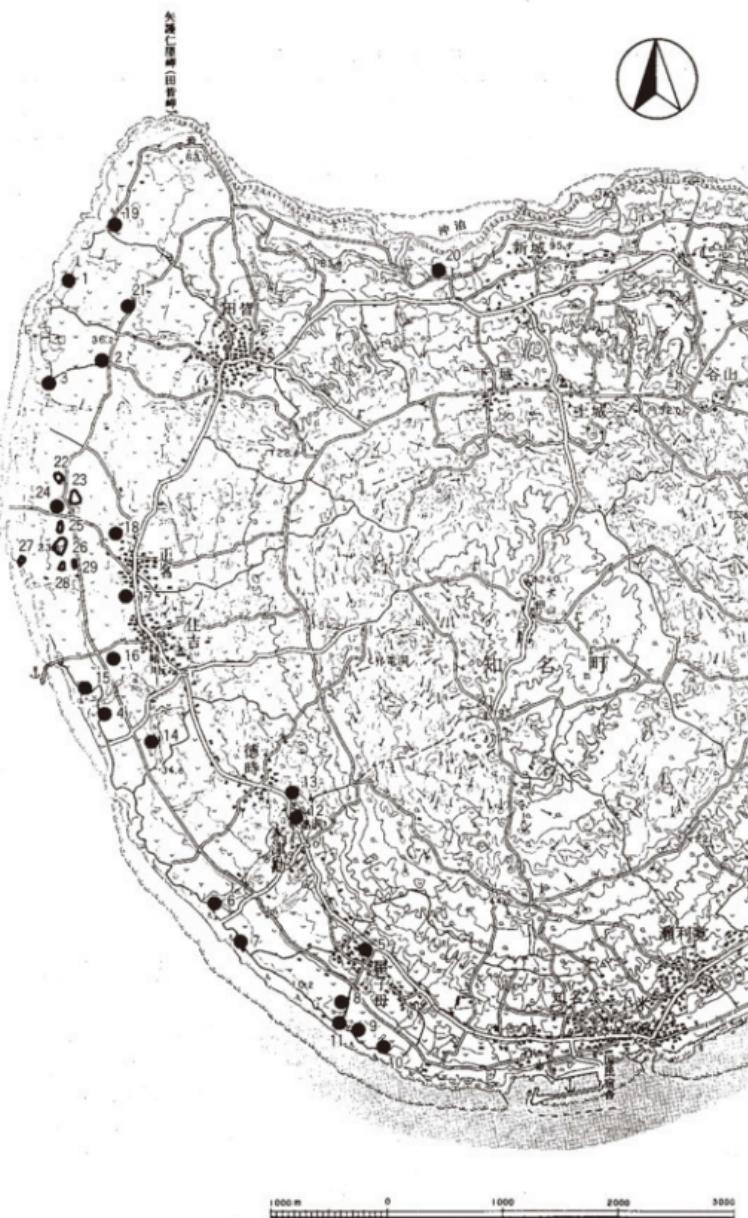
沖永良部における最初の発掘調査は、昭和29年の河口貞徳による和泊町畦布わんじょうナーパンタ遺跡の発掘である。知名町においては、昭和32年、九学会連合奄美大島共同調査の考古班による住吉貝塚の発掘調査が行われたのが最初で、土器や石器等のほかに石組住居跡が発見された。その後、昭和56・57年には鹿児島大学・沖縄国際大学によりスセン当貝塚、神野貝塚の調査が行われた。昭和57・58年に河口貞徳による中甫洞穴の調査が3次に亘って実施され、爪形文土器・轟式土器や石器・人骨等が出土した。昭和60年には県営圃場整備事業に伴う赤嶺原遺跡の調査と、町単独事業として遺跡分布調査が実施され、それまでの遺跡を含め24の遺跡が確認された。昭和62年には、熊本大学による石原余多遺跡の調査が行われた。同年には、県営圃場整備事業に伴う前當遺跡の調査が行われ、12・13世紀と考えられる溝状遺構と鍛冶跡の遺構が検出され、類須恵器・近世陶器類が出土した。平成4年には県営圃場整備事業に伴うウロク畠遺跡他の確認調査が実施され、柱穴が検出された。同年には今回の調査と同時期に町道改修工事に伴う前兼久遺跡の発掘が実施され石斧等が出土した。

今回調査を実施した浜須B遺跡の近くには田皆伊美田遺跡や曾根遺跡などが所在し、屋子母に至る西海岸には多くの遺跡が集中して発見されている。

大当遺跡・浜須A・B遺跡は、知名町の北西部で、観光地の田皆岬の近くに位置する。大当遺跡は、海岸線から直線で約200m内陸に入り、標高約30mの畠地帯の中に立地する。この大当遺跡から東へ約1kmの距離に浜須A遺跡が所在する。浜須B遺跡は、浜須A遺跡から南東へ約200mの距離を測り、標高が約13m～23mを測る畠地帯の端部で、間近に海岸を望む場所に立地する。

〔参考文献〕

- | | | |
|----------|------------------|-------------------------|
| 知名町教育委員会 | 「赤嶺原遺跡」 | 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985 |
| 知名町教育委員会 | 「知名町埋蔵文化財分布調査概報」 | 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1986 |
| 知名町教育委員会 | 「前當遺跡」 | 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1986 |



第2図 周辺遺跡位置図

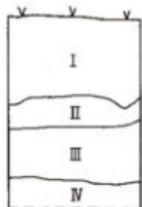
第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	大当	田皆字大当	台地			1992年調査
2	浜須 A	田皆字浜須	タ	古墳～歴史	土器片・類須恵器	タ
3	浜須 B	田皆字浜須	タ	縄文	土器片	タ
4	住吉貝塚	住吉金久	砂丘	縄文(後)	土器(宇宿・上層・下層式)石器・骨器	1957年調査
5	屋子母遺跡	屋子母 植村	丘陵		土器・石器	
6	神野遺跡	大津勘神野188 193, 195, 196-1	砂土	縄文(前)	土器(室川下層式) 石器・人骨	1982～3年調査
7	スセン当貝塚	屋子母スセン当 177の1, 172	タ	古墳	土器(スセン当式) 石器	1982年調査
8	当ノ増遺跡	屋子母 当ノ増	タ		土器・石器	
9	長浜遺跡	大津勘長浜	タ	縄文(前)	土器(室川下層式・ 市来式)土器・貝器	
10	泊り原	屋子母字泊り原	丘陵		無文土器	
11	川春	屋子母字川春	砂丘		青磁片	
12	大津勘フーダトウ	大津勘字フーダトウ	台地		石斧	
13	大津勘フバド	大津勘フバド	タ		類須恵器・白磁	
14	木部蘭追	住吉字木部蘭追	タ		無文土器・青磁片	
15	友留	住吉字友留	タ		無文土器	
16	手殿	住吉字手殿	タ		青磁・染付	
17	正名内間	正名字内間	タ		類須恵器・白磁	
18	志良部当	正名字志良部当	タ	弥生・中世		
19	田皆伊美田	田皆字伊美田	台地		磨製石斧	
20	アンギム	下城字アンギム	タ		無文土器・類須恵器	
21	曾根	田皆字曾根	タ	古墳	土器片・チャート	
22	伊舍良	正名字伊舍良	タ	古墳～歴史	土器片	
23	池原	正名字池原	タ	タ	類須恵器・青磁	
24	蒂野	正名字蒂野	タ	タ	土器片	
25	川仁堂 A	正名字川仁堂	タ	タ	土器片・類須恵器	
26	川仁堂 B	正名字川仁堂	タ	タ	土器片・類須恵器	
27	ウクロ畠 A	正名字ウクロ畠	タ	タ	ふいご羽口・鉄滓	
28	ウロク畠 B	正名字ウロク畠	タ	タ	土器片	
29	ウロク畠 C	正名字ウロク畠	タ	タ	土器片	

第3章 大当遺跡

第1節 調査の概要

大当遺跡は、標高約30mで田皆岬に近い畑に立地する。今回の調査対象となった1枚の畑の東端に1トレンチ、中央部に2トレンチ、西端に3トレンチを任意の大きさで設定して調査を行った。いずれのトレンチからも遺構・遺物とも確認されなかった。かつての水田を埋め立てて畑にしたらしく、マンガン分を含む層が確認された。調査対象面積は2,000m²で、調査実施面積は25.5m²であった。なお、層序は次のとおりであった。



I層	表層
II層	暗黄褐色土 マンガン分を多量に含む。
III層	暗黄橙色弱粘質土。
IV層	茶褐色粘質土。

第3図 大当遺跡土層模式図

第2表 大当遺跡トレンチ一覧表

番号	大きさ (m)	遺 物	遺 構	包含層までの深さ	備 考
1	2.5×3.5	無	無		
2	2.8×3.5	無	無		
3	2.5×3.5	無	無		

第2節 各トレンチの調査

1トレンチ

調査対象区域となった畑の東端に2.5×3.5mの大きさで設定したトレンチである。表層下は、赤色土層、暗黄褐色土層、マンガン分を含んだ暗黄褐色土層と続き、この層まで掘り下げると石灰岩が現く。地表から1.5mまで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認されなかった。

2トレンチ

1トレンチから北西へ約50m、畑のほぼ中央部分に2.8×3.5mの大きさで設定した。表層下は、マンガン分を多く含む暗黄褐色土層、マンガン分の少ない暗黄褐色土層、粘質の強い茶褐色土層となる。2.2mまで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認されなかった。

3トレンチ

2トレンチから西へ約35m、畑の西端に大きさ2.5×3.5mで設定した。表層下は、マンガン分を多く含む暗黄褐色土層、赤色土層、黄褐色土層、赤褐色土層、石灰岩の粒子を含む茶褐色土層と続く。約1.8m掘り下げたが、遺構・遺物とも確認されなかった。



第4図 大当遺跡トレンチ配置図

第4章 浜須A遺跡

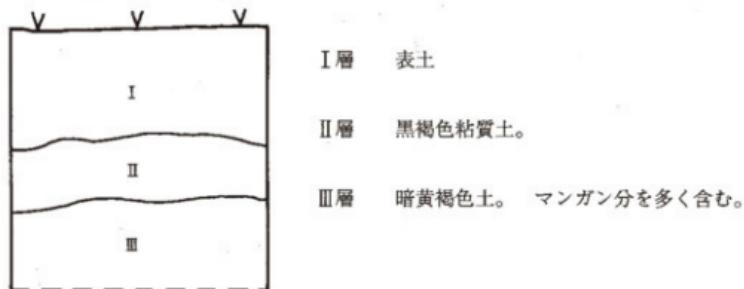
第1節 調査の概要

浜須A遺跡の調査は、大当遺跡の調査終了後に引き続き行った。浜須A遺跡は、標高約30mの畑に立地する。調査対象となった畑2枚のうち、東側の畑は土地改良事業区内から除外されるとのことで西側の畑1枚を調査した。調査対象となった畑以外はすでに土地改良事業が実施されていた。

調査は、任意の大きさで5本のトレンチを設定し実施した。表層は重機を使い、その後人力で掘り下げた。1～3トレンチは搅乱を受け40～70cmで赤褐色粘質土（マージ）かコーラルとなり、遺構・遺物とも確認されなかった。4トレンチと5トレンチからは、かなりローリングを受けた土器の細片が2～3点出土したが、状況から流れ込みの遺物と判断した。出土土器の時期等については細片のため不明であった。調査対象面積は9,000m²で、調査実施面積は29.6m²であった。

なお、当遺跡については工事着工前の立会を平成3年11月4～6日に行った。その結果、遺構・遺物とも確認されなかった。

層序については、次のとおりであった。



第5図 浜須A遺跡土層模式図

第3表 浜須A遺跡トレンチ一覧表

番号	大きさ(m)	遺物	遺構	包含層までの深さ	備考
1	1.6×3.5	無	無		
2	1.6×4	無	無		
3	1.6×3	無	無		
4	1.6×4	有	無		ローリングを受けた土器小片
5	1.6×4	有	無		ローリングを受けた土器小片



第6図 浜須A遺跡トレンチ配置図

第2節 各トレーニチの調査

1 トレーニチ

畠の西端に大きさ $1.6 \times 3.5\text{m}$ で設定した。表層下は搅乱を受け、約70cmで赤褐色粘質土(マージ)となる。遺構・遺物とも確認されなかった。

2 トレーニチ

1 トレーニチから東へ約12m、 $1.6 \times 4\text{ m}$ の大きさで設定した。表層下は若干の搅乱を受け、暗黄橙色砂質土層となる。遺構・遺物とも確認されなかった。

3 トレーニチ

畠の東端、2 トレーニチから約20m、 $1.6 \times 3\text{m}$ の大きさで設定した。表層の下に黒褐色土層が部分的に若干残り、黄灰色砂質土層になる。遺構・遺物とも確認できなかった。

4 トレーニチ

畠の北端に大きさ $1.6 \times 4\text{m}$ で設定したトレーニチである。地層は、表層・黒褐色土・暗黄褐色土と続く。Ⅲ層の暗黄褐色土層からかなりローリングを受けた土器小片が2点出土したが、時期等については不明であった。

5 トレーニチ

4 トレーニチから南西へ約10mの位置に $1.6 \times 4\text{m}$ の大きさで設定した。地層は、4 トレーニチと同じで調査区内では安定している。Ⅱ層の黒褐色土層からローリングを受けた土器小片が出土したが、時期等については不明であった。

第5章 浜須B遺跡

第1節 調査の概要

浜須B遺跡は沖永良部島の西部に位置し、間近に東シナ海をのぞむ標高13mから23mの海に向かう緩やかな傾斜地に立地する。浜須A遺跡よりは直線距離で約200m海側に位置している。遺跡の現況は、畑地および荒地となっていた。今回の調査対象区外の畑地では、すでに土地改良事業に伴う工事が開始されていた。

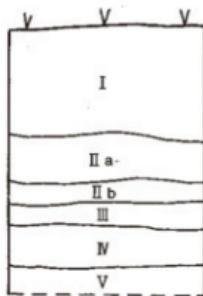
調査の方法としては、調査対象区域内の北端から南側へ、任意の大きさのトレンチを合計23本設定して実施した。調査対象区内には地権者による造成によって、地下げや削平が行なわれている畑地が存在していたため、地形を考慮しながらトレンチの場所を設定した。各トレンチの調査は、表土を重機を用いて除去したのちに、人力による掘り下げ作業を実施することにより、遺物包含層・遺構の有無を確認することとした。

表土を除去した時点で、設定した23本のトレンチのうち半数近くのトレンチでは、すでに天地返しや削平が行なわれていることが確認され、表土下には石灰岩やマージが検出された。しかし、1・2・6・7・10・13・14・15トレンチでは削平を免れた遺物包含層の存在が確認され、土器などの遺物が出土した。特に6・7トレンチの遺物包含層の厚さは80cmを越え、多量の土器と柱穴の存在を確認した。

確認調査の結果、調査対象面積23,000m²のうち遺物包含層が残存している面積は18,300m²であることが判明した。遺跡の範囲は第8図に示したように3つの地点に分かれている。遺跡が連続して広がっていないのは、天地返しや削平を受けたことにより遺跡が破壊されたためだと思われる。

調査を実施した各トレンチの状況については、第4表にまとめた。

層序は、基本的には浜須A遺跡と同様であるが、トレンチによってはⅡ層を細分できる。遺物はⅡ層からⅣ層にかけて出土した。一部のトレンチを除いて、遺構を確認したV層上面までを調査の対象とした。



I 層	表層
II a層	黒褐色土 赤色の粘土粒子を含む。
II b層	黒褐色土
III 層	暗黄褐色土
IV 層	暗茶褐色土
V 層	暗黄橙色土

第7図 浜須B遺跡土層模式図



第8図 浜須B遺跡トレンチ配置図及び遺跡範囲図

第4表 浜須B遺跡トレンチ一覧表

番号	大きさ(m)	遺物	遺構	包含層までの深さ	備考
1	2×7	土器	無	25cm	
2	2×6	土器	無	20cm	
3	2×4.5	無	無		
4	2×5.5	無	無		
5	2×4	無	無		
6	2×5	土器	柱穴	60cm	包含層の厚さ60~80cm
7	2×5	土器	柱穴	50cm	包含層の厚さ60~80cm
8	2×4	無	無		
9	2×5	無	無		
10	2×4	土器	無	50cm	
11	2×4	無	無		
12	2×4	無	無		
13	2×4.5	土器	無	50cm	
14	2×7	土器	無	40cm	
15	2×26	土器	無	25cm	
16	2×4	土器	住居跡・柱穴	25cm	28.04m ²
17	2×3.5	無	無		
18	2×5	無	無		
19	2×4	無	無		
20	2×4	無	無		
21	2×4	無	無		
22	2×4	無	無		石灰岩の間に包含層
23	2×4	無	無		削平のため住居跡床面のみ残存

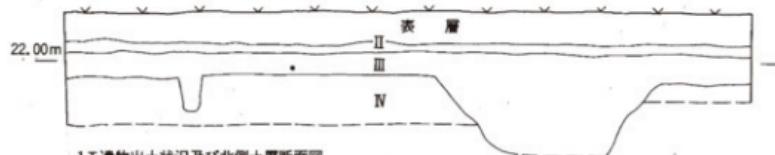
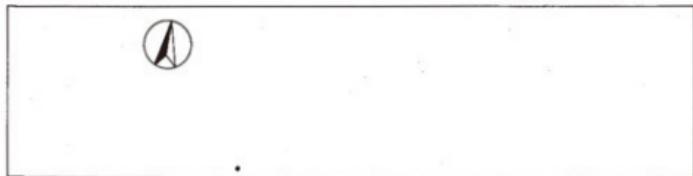
第2節 各トレンチの調査

1 トレンチ（第9図）

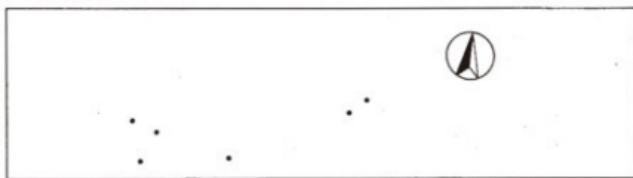
現況は畑で標高約22m、遺跡の北端に2×7mの大きさで設定した。1トレンチから4トレンチはほぼ同レベルに位置する。表層下、II層の黒褐色土層は薄く、III層の暗黄褐色土層から土器が1点出土した。

2 トレンチ（第9図）

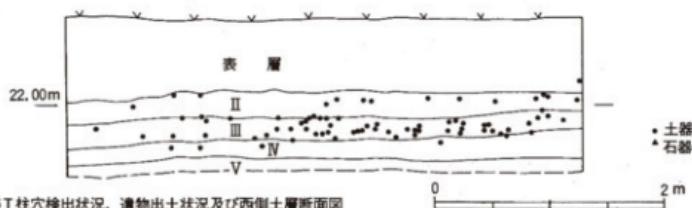
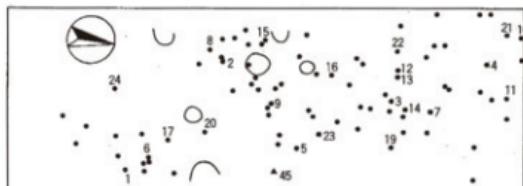
1トレンチから南へ約40mの位置に2×6mの大きさで設定した。層序は表層、II層の黒褐色土層、III層の暗茶褐色土層と続く。III層から6点の土器片が出土した。



1 T遺物出土状況及び北側土層断面図

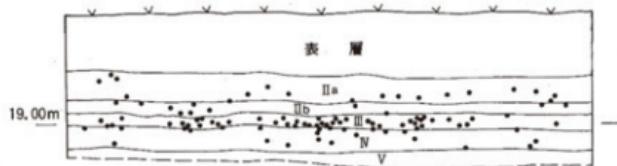
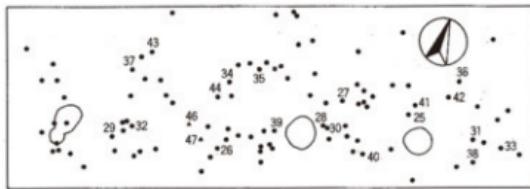


2 T遺物出土状況及び北側土層断面図

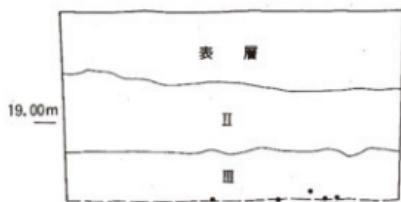
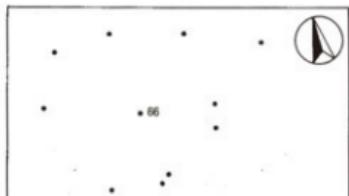
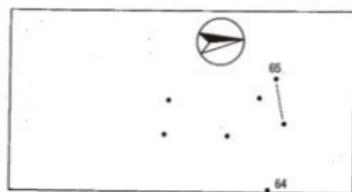


6 T柱穴検出状況、遺物出土状況及び西側土層断面図

第9図 1・2・6トレンチ遺物出土状況及び土層断面図

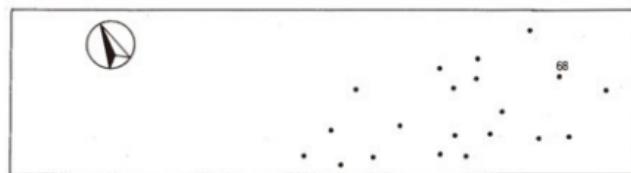


7T柱穴検出状況、遺物出土状況及び北側土層断面図



10T遺物出土状況及び西側土層断面図

0 2 m



14T遺物出土状況及び北側土層断面図

第10図 7・10・13・14トレンチ遺物出土状況及び土層断面図

3 トレンチ

2 トレンチから南へ約30mの位置に $2 \times 4.5\text{m}$ の大きさで設定した。表層下すぐにマージが覗き、地表面から60cm掘り下げたが、遺構・遺物とも確認できなかった。

4 トレンチ

3 トレンチからさらに南に25mの位置に $2 \times 5.5\text{m}$ の大きさで設定した。表層下すぐにマージと石灰岩が覗き、地表から45cmまで掘り下げた。遺構・遺物も確認されなかった。

5 トレンチ

4 トレンチから南西へ約40m、約2m段落ちした畝に設定した。トレンチを $2 \times 5\text{m}$ の大きさで設定し調査を行なったが、すでに天地返しが行われ遺構・遺物とも確認されなかった。

6 トレンチ

5 トレンチと同じ畝の北側に設定した大きさ $2 \times 5\text{m}$ のトレンチである。層序は安定し、1 m 20cmでマージに至る。II～IV層までが包含層で、その厚さは60～80cmを測る。84点の土器が出土し、V層上面で柱穴を6基確認した。

〈遺構〉(第9図)

V層上面で検出した6基の柱穴は、径が12～25cmで、規則性については不明である。上面を検出したのみで埋め戻した。

〈遺物〉(第11図1～24 第12図45)

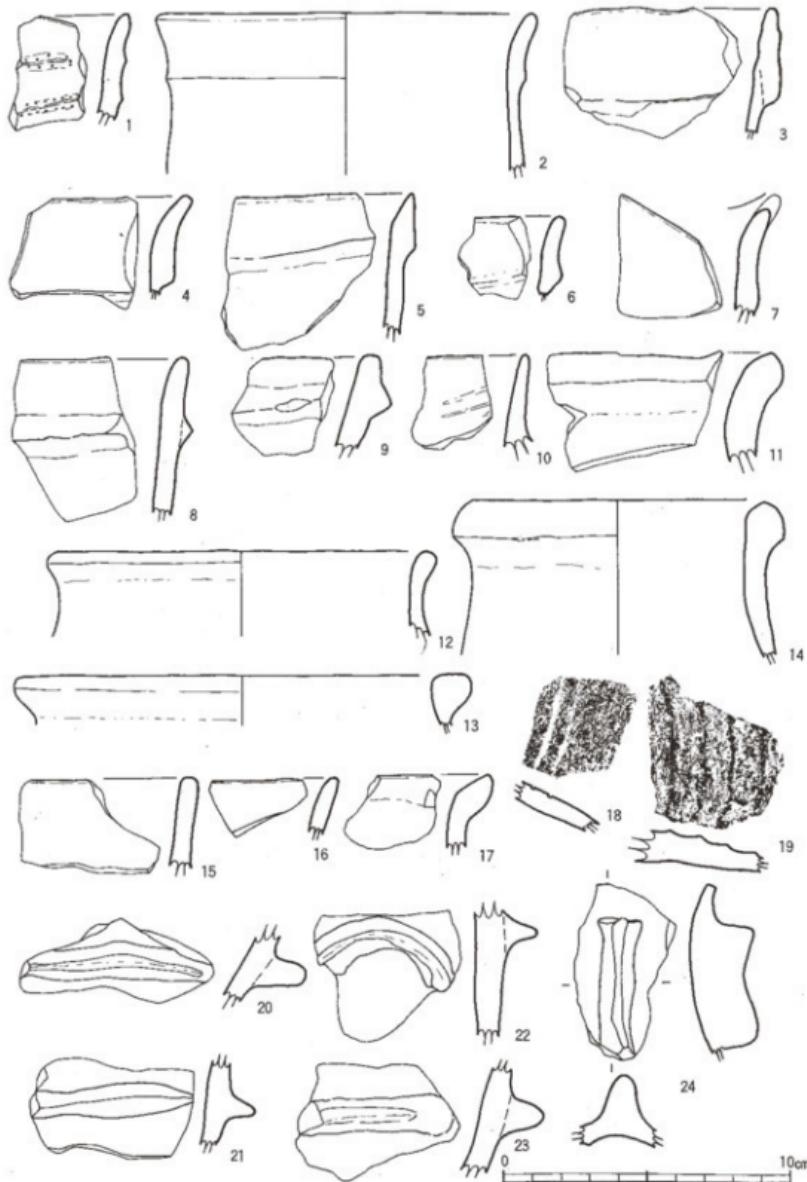
出土遺物で図化したのは25点である。6・10・17はII層出土で、それ以外はIII層出土である。1は細目の突帯を2条もち、突帯を挟んで細かな連点を施している。2～16は無文の鉢形土器である。2～7は、口縁部が肥厚する。2は復元口径13.4cmを計り、7は波状口縁となる。8・9は断面三角形の突帯をもち、10も同様の土器と思われる。11～14は口縁端部が肥厚する。14の復元口径は11.5cmを計り、口縁端部が肥厚し、肩が多少張る深鉢である。17～19は壺形土器である。18は2条の平行沈線を施し、19は4条の細い突帯をもつ。18・19とも胎土が全体的に密で在地のものとは異なる。20～24は外耳土器の破片で、24は壺形土器の頸部に継に付く外耳である。45は、砂岩製の磨石である。風化のために器面の剥落が著しい。

7 トレンチ

5・6 トレンチと同じ畝の西端に、 $2 \times 10\text{m}$ の大きさで設定した。土層は6 トレンチと同じである。II層の内、赤色の粒子を含まない層をII b層と分層した。6 トレンチと同じく包含層はII～IV層で、厚さ60～80cmを測る。調査の結果、柱穴が4基検出され、包含層から102点の土器が出土した。

〈遺構〉(第10図)

V層上面で4基の柱穴を検出した。4基の柱穴の径は15～30cmであった。調査はトレンチ内の狭い面積で、その全体像をつかむことはできなかった。上面を検出し、実測したのち埋め戻した。



第11図 6 トレンチ出土遺物

《鑑 物》(第12図25~44・46・47 第13図48~63 第14図71~76)

33・40はⅡ層出土でそれ以外はⅢ層出土である。25は横位の沈線と数条の斜位の沈線で文様を構成している。26は斜位の沈線を施している。27は細い突帯を挟んで連点を施している。連点は上下対称になっており、二叉状になった工具を使ったと思われる。28~39は無文の鉢形土器である。28~30は口縁部が肥厚するもの、31・32は突帯も有するかもしくは突帯様に見せるもの、33・34は口縁端部が肥厚するもの、35~39はそれ以外のものである。

40~42は壺形土器である。復元口径は41が7.1cm、42は9.1cmを計る。43・44は壺形土器の外耳部分である。45は砂岩製の磨石で、風化のため表面の剥落が著しい。46は一部欠損した小型局部磨製石斧である。47は石斧の未製品である。

48~63・71~76は、全て6トレンチ及び7トレンチ付近の表探遺物である。48は横位に緩杉状の沈線が施され、波状口縁となる。49・52は横位の沈線とそれに斜行する沈線で文様が構成されている。50は斜位の沈線が施されている。51は横位の沈線とそれに直交する刺突が施される。53は口縁上部に二叉状の工具で連続的に刺突が行なわれている。54は斜位の沈線と突帯上の刺突文で文様が構成される。55はカマボコ状の突帯に不規則な刺突が施される。56は斜位の短沈線を連続して施し、57は横位の連続する刺突が施されている。58は口縁端部が丸味をおびて肥厚し、口唇部にも刺突が入る。59~61は無文の口縁部である。62・63はいずれも平底の底部である。71・72は石斧の未製品で、73~76は局部磨製石斧である。

8トレンチ

5~7トレンチを設定した畑の南東側の畑に8・9トレンチを設定した。表層の下にはすぐ赤褐色粘質土(マージ)と石灰岩が現く。遺構・遺物とも確認されなかった。トレンチの深さは約80cmであった。

9トレンチ

8トレンチと同じ畑に2×5mの大きさで設定し、約75cm掘り下げた。8トレンチと同じように表層の下にはすぐに石灰岩が現われる。遺構・遺物とも確認されなかった。

10トレンチ(第10図)

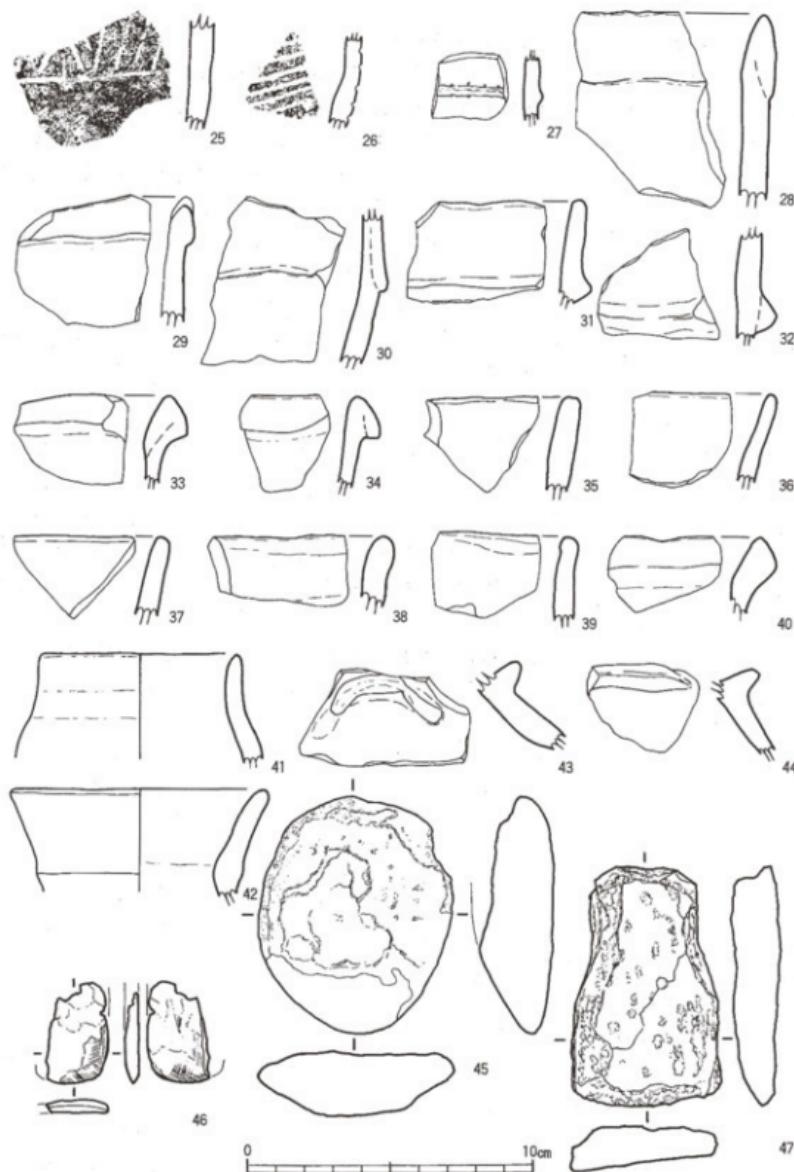
9トレンチから南西へ約35m、段落ちした畑で谷頭に近い位置に2×4mの大きさで設定した。表層の厚さは60cmを越える。Ⅱ層・Ⅲ層から土器が出土した。掘下げが2mに近付いたために、Ⅲ層途中までの確認となった。

《鑑 物》(第13図64・65)

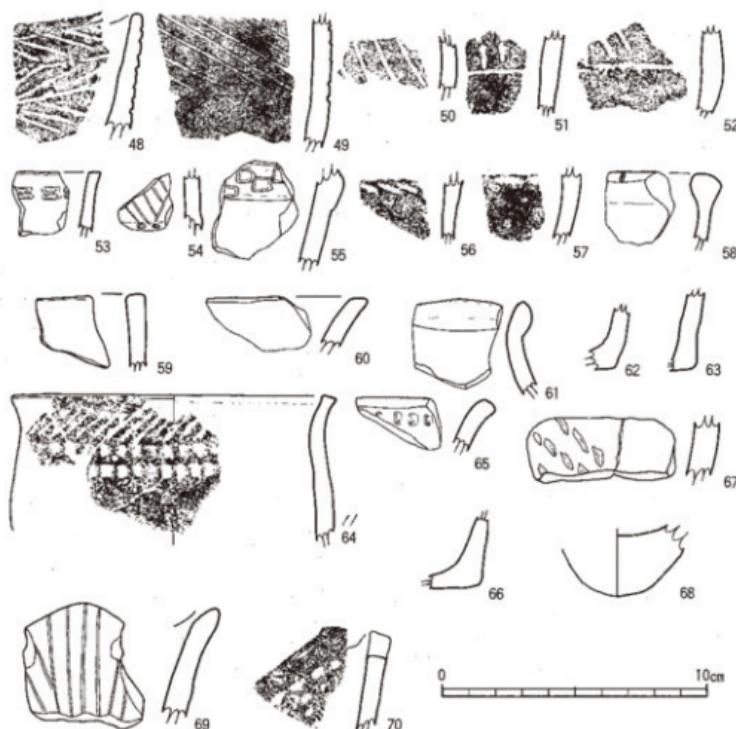
図化した2点の遺物はⅢ層出土である。64は口縁部が外反し、頸部は多少締まり胴部は僅かに張る。復元口径12.3cmで、口縁部から胴上部にかけて斜位の平行な沈線と胴上部に横位の刺突が2段施されている。65は、外反する口縁上部に1段の刺突がある。

11トレンチ

11~14トレンチの標高は、全て19m前後である。10トレンチから南へ約20m、標高約19.5mの位置に大きさ2×4mで設定した。表層下、すぐに石灰岩が現く。トレンチの深さは25cmであった。



第12図 6・7トレンチ出土遺物



第13図 6・7トレンチ付近表採遺物, 10・13・14・15トレンチ出土遺物

12トレンチ

11トレンチから南西へ約30m, 2×4.5mの大きさで設定し掘り下げた。表層下は天返しが行われ、トレンチの深さは110cmであった。遺構・遺物は検出されなかった。

13トレンチ

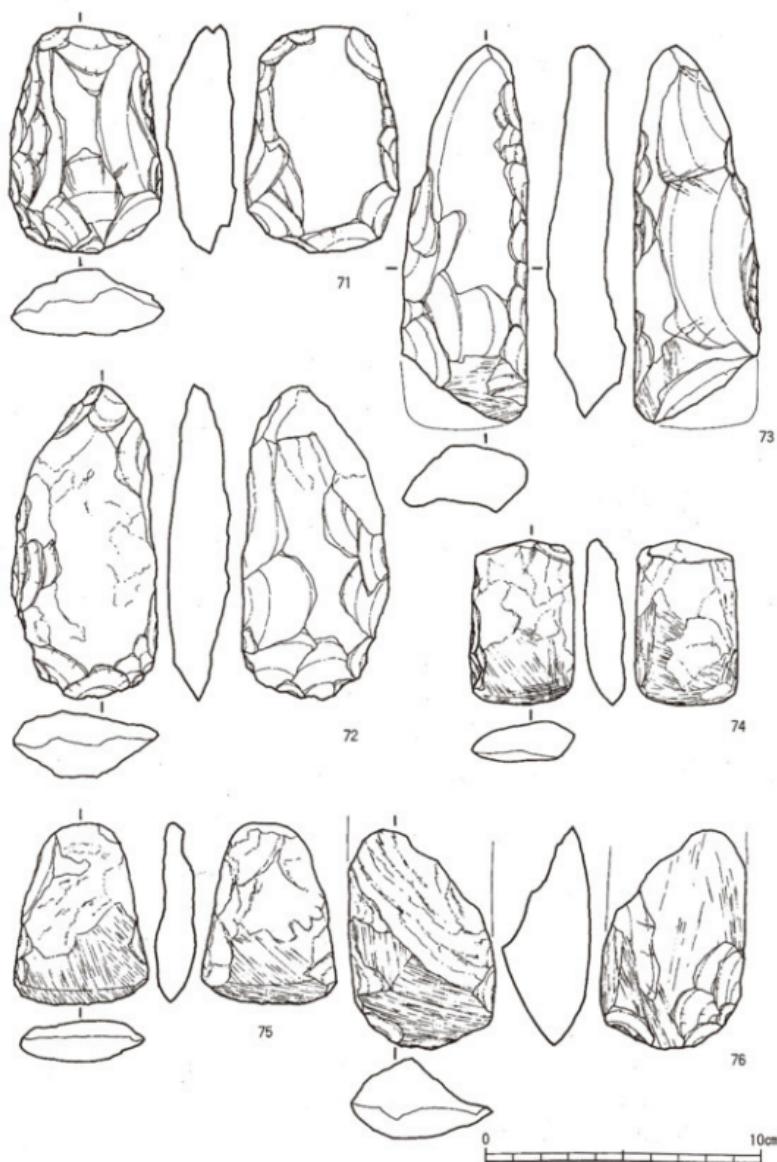
12トレンチから南へ約20m, 2×4.5mの大きさで設定し掘り下げた。II層がa・bに分層でき、11点の土器が出土した。

《遺物》(第13図66)

図化し得たのはII層から出土した66の1点のみで、平底の底部である。

14トレンチ (第10図)

13トレンチから南西へ約30m, 2×7mと細長く設定した。III層から20点の土器が検出されたが、トレンチの西側部分の包含層はすでに削平を受けていた。



第14図 6・7 トレンチ付近表探遺物

〈遺物〉(第13図67・68)

図化し得たのは、2点でⅢ層出土である。67は風化が進み部位等については不明であるが、刺突が見られる。68は、本調査では唯一出土した丸底の底部である。

15トレンチ

2×26mで設定した。表層下は石灰岩かマージとなるが、石灰岩の周りに部分的に包含層が存在し、土器片が出土した。

〈遺物〉(第13図69・70)

69は波状口縁で、沈線を口縁上部から継位もしくは斜位に施している。70は開き気味の口縁に山形の突起をもつ。風化が進み、2列1組の点刻文が疑似点刻文となるか、また1段もしくは2段配するかは不明である。

16トレンチ

15トレンチの北側に2×4mで設定した。地表から約20~25cmで遺物が出土し、住居跡が検出されたため拡張して調査を進めた。その結果、5基の住居跡と1基のピットが検出された。調査面積は、28.04m²であった。

調査は、1号住居跡と2号住居跡の上面プランを検出した後、1号住居跡は東西方向に2号住居跡は東西と南北の二方向に土層観察ベルトを残し、断面を観察しながら慎重に検出した。

〈遺構〉

1号住居跡(第15図)

1.7×1.9mのほぼ隅丸方形に近く、東側に三角形の張り出しをもつ。5~30cm程度の礫が10個程度散在する。検出面から床面までの深さは5cm程度である。

2号住居跡(第16図)

2.35×2.4mのほぼ方形で、検出面から床面までは7cm程度である。1号住居跡の床面とのレベル差は0~8cmで、2号住居跡の床面の方が若干低い。住居跡内の北東隅に直径約30cmのほぼ円形の焼土を検出した。西側中央部には直径約25cmのほぼ円形、深さ37cmの柱穴が1基検出された。住居内には14個の礫が散在する。

3号住居跡

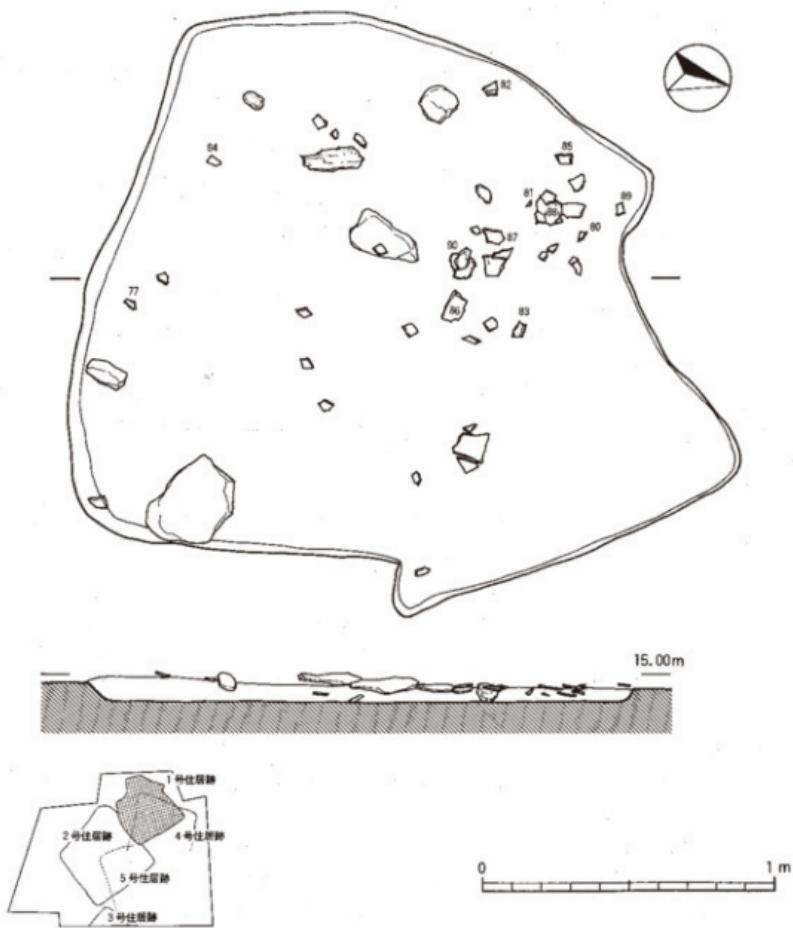
拡張した16トレンチの南側で上面の一部を検出した。プランは明確ではないが、隅丸方形と考えられる。

4号住居跡(第17図)

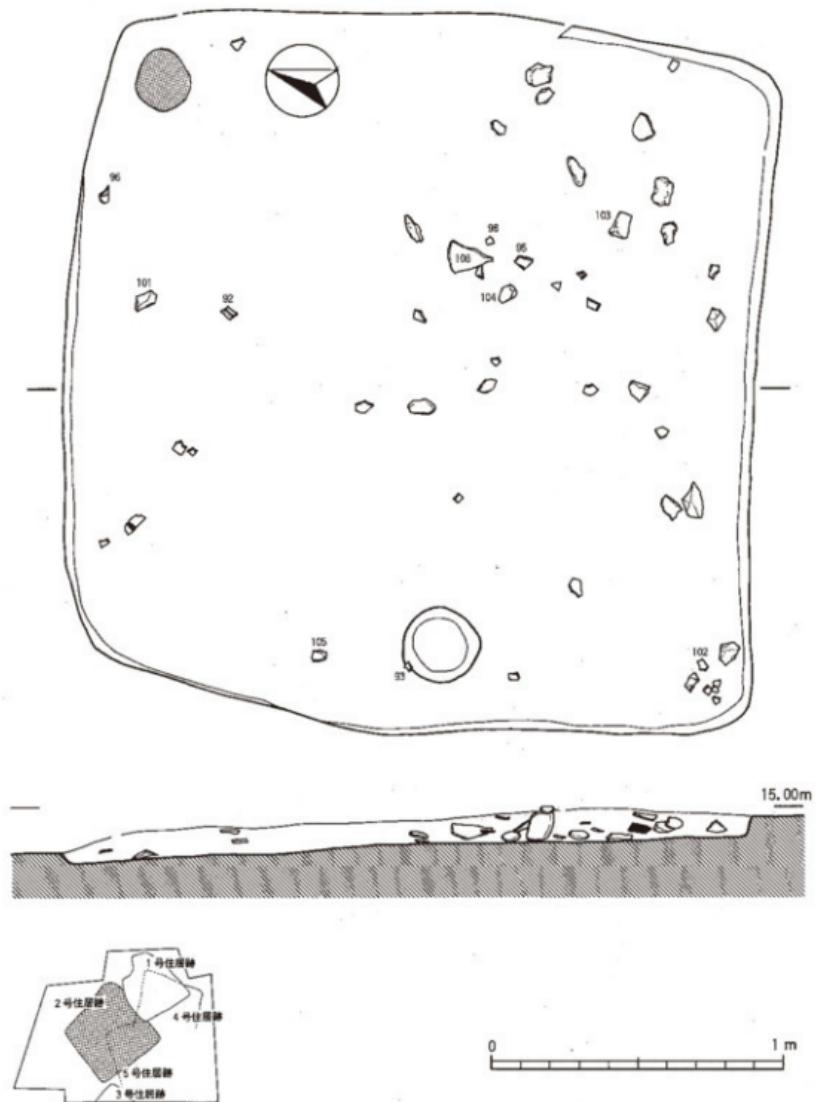
1号住居跡の下から検出し、1号住居跡との床面のレベル差は最大で8cmである。北東側の約半分を検出したが、南西側は不明であった。一辺が約2.3mで一部張り出しをもつ可能性もある。東側に25×35cmの楕円形の焼土を検出した。東側における検出面から床面までの深さは最大で10cm程度であった。

5号住居跡

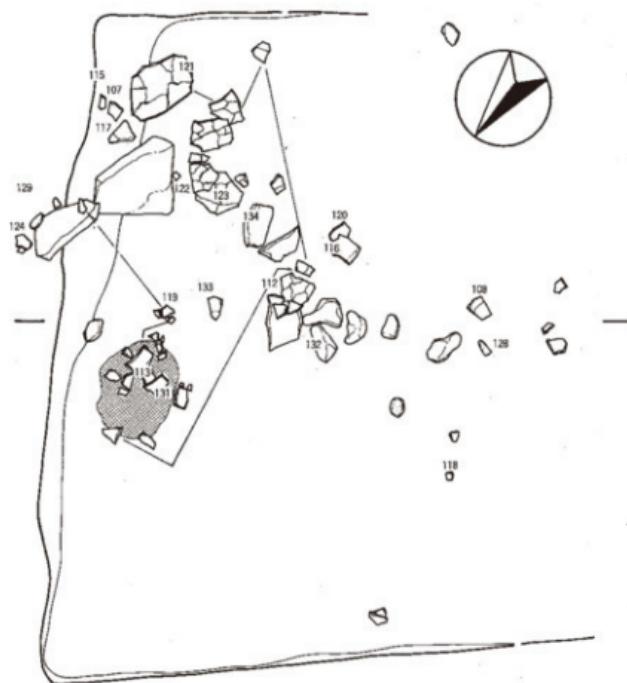
4号住居跡のプランの全容が不明のため正確ではないが、4号住居跡より5号住居跡が時間的には先行すると考えられる。北側のコーナーしか検出できなかったが、隅丸方形と推定される。遺物の出土はなかった。



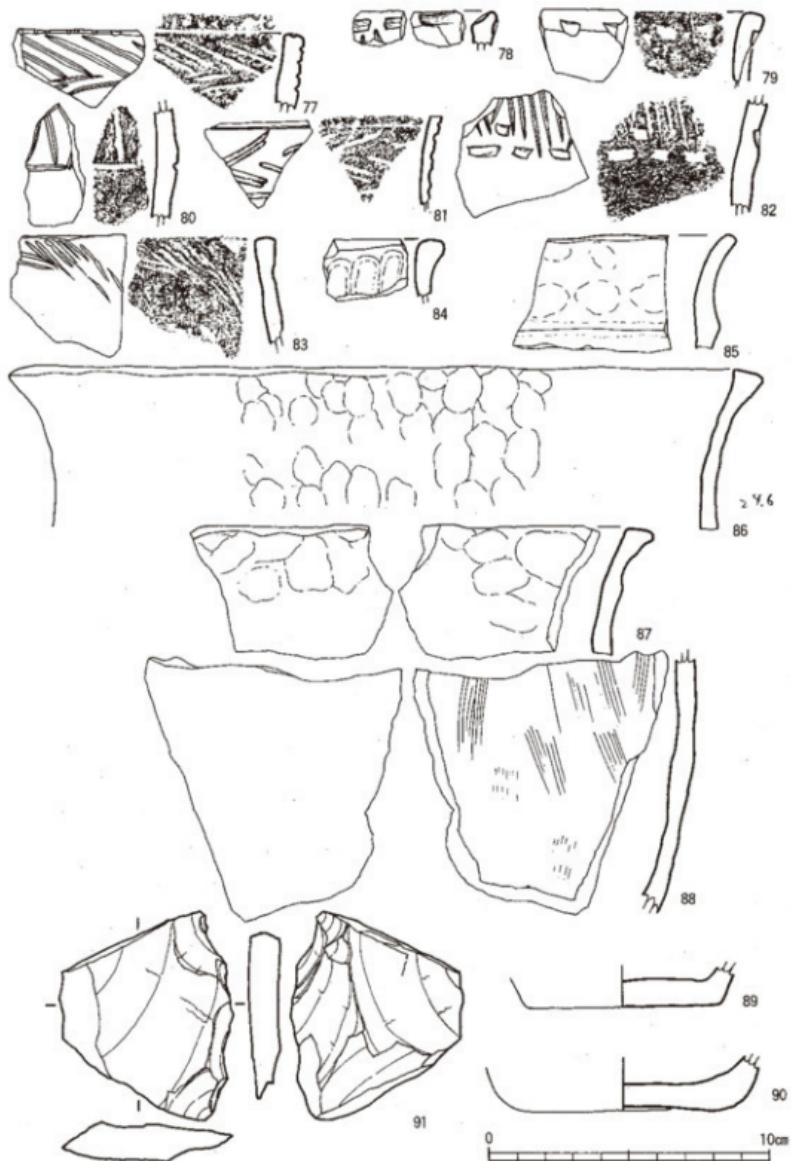
第15図 1号住居跡検出状況



第16図 2号住居跡検出状況



第17図 4号住居跡検出状況



第18図 1号住居跡内出土遺物

（遺物）（第18図～第25図）

1号住居跡内からは30点の遺物が出土したが、図化し得たのは14点であった。77は、口唇部に刺突が施され、外面には綾杉状に短沈線で文様が施されている。78は口縁上部の内外に刺突が施され、口縁部外面は小片のため不明確ではあるが縦方向の沈線があると思われる。79は外面が剃落しているが、口縁上部に1段の刺突が横位に走る。80・81は一本の横位の沈線と、それに直行もしくは斜行する沈線とで文様が構成されている。82は、基本的には一段と思われる不規則な刺突が横に施され、その上部には縦位の沈線が施される。83～87は無文の鉢形土器の口縁部である。83は調整痕が顕著に残り、口縁部が内傾する。86・87は口縁部が外反し、その端部は外側にせりだして口唇部は平坦となる。ともに器面調整の指頭痕が多く残る。86は復元口径27cmを測る。84は口縁端部が肥厚し、85は口縁部肥厚帯の下端に段をもつ。88は内部にハケ状の工具による調整痕がある。89・90は平底で復元底径は89が7cm、90が8cmである。91は石斧片と思われる。なお、床着の土器は無文の土器片である。

2号住居跡内からは、35点の土器が出土した。図化したのは15点である。92は口縁端部の器壁が厚くなり、横位と斜位の沈線で文様を構成し、口唇部に刺突が入る。93は山形突起の口唇部に刺突があり、文様は沈線を施す。94は、短沈線を連続したような沈線が口縁上部に入る。95は肥厚する口縁端部が外反し、2列を1組とする刺突が施される。96～98は斜位もしくは綾杉状の沈線で文様が構成され、99は横位の短沈線、100は刺突が施される。101・102は平底の底部で復元底径はそれぞれ10.8cmと6.6cmを測る。石器は4点出土し、103・104・106は石斧の未製品、105は石斧の基端部である。

4号住居跡内からは42点の遺物が出土した。図化したのは28点である。107は断面三角形に肥厚した口縁部が外反し頸部は締まり、なだらかに胴部に至る。口縁部には斜め上方から深目の刺突があり、胴上部にも刺突か刻みがはいる。復元口径は12cmである。108は風化が著しく文様等については不明確である。口縁端部が外側に張り出し口縁下部には一条の突帯を廻らす。そしてその間に斜位の沈線を施す。突帯の上部にも短い沈線が入る。109は口縁上部に右方向から刺突が、110・111には沈線が施される。112は細い突帯の上に連続した刺突を、そしてその上部には沈線文を鋸歯形に配している。113～117は無文の鉢形土器である。113・116は口縁端部が外側に張り出し、115・117は口縁端部より多少下がった部分が肥厚する。118は小型の壺で山形の突起を4つもつと思われる。復元口径は6cmであった。119は口縁部が肥厚する無文の深鉢で復元口径は23.4cmとなる。120・123は鉢形土器の胴部片で調整のための指頭痕が残る。121・122は壺形土器の胴部から頸部にかけての破片である。124・125は平底の底部である。石器は8点出土した。126は石斧の未製品、127～130は局部磨製石斧で、128以外は欠損品である。131～133は磨石である。134は石皿で、欠損した後背面を磨石等に利用している。

135～138は16T出土の遺物であるが、139～158は表層出土である。135は波状口縁となり、口唇部に刻みと口縁部に鋸歯状の沈線が施される。136・137は口唇部と口縁部に刺突が入り、138は波状口縁となる。138は刺突が2段みられる。139～141・146は沈線で文様を構成する口

縁部片である。142～144は刺突が施されている。145～147は口縁部に刺突が入り、145・146は斜位の沈線が施される。148・149は四角形に近い形に肥厚した口縁部に斜位の短沈線が入る。150～151は無文の口縁部である。152～157は斜位・鋸歯状・格子状に沈線を施してある。158は、横位の細い突帯の上下に刺突が施されている。

17～20トレンチ

遺跡内では西側の海岸に近く、標高が13～14mの位置に2×4mの大きさで設定したトレンチである。いずれのトレンチも現況は荒地で、表層下は石灰岩かマージとなる。遺構・遺物とも検出されなかった。

21トレンチ

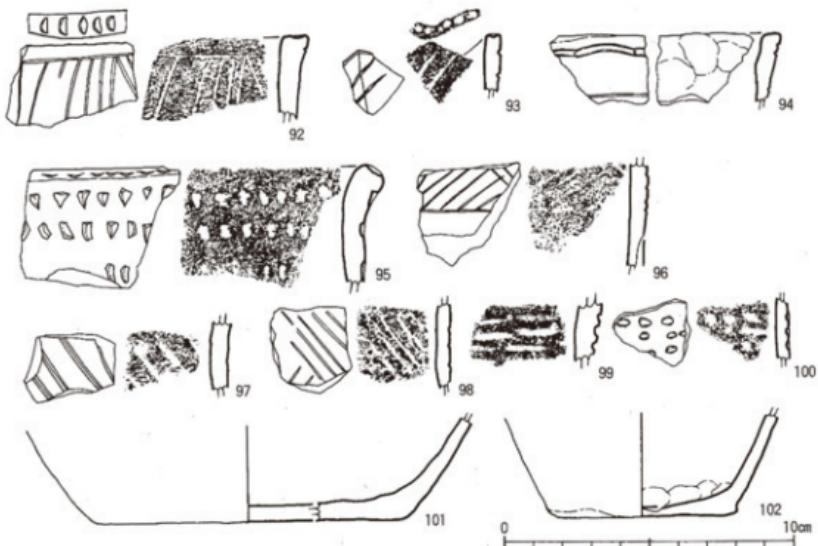
遺跡内で北西端に2×4mの大きさで設定したトレンチである。耕作土の下は石灰岩混じりのマージである。約50cm掘り下げたが、遺構・遺物とも検出されなかった。

22トレンチ

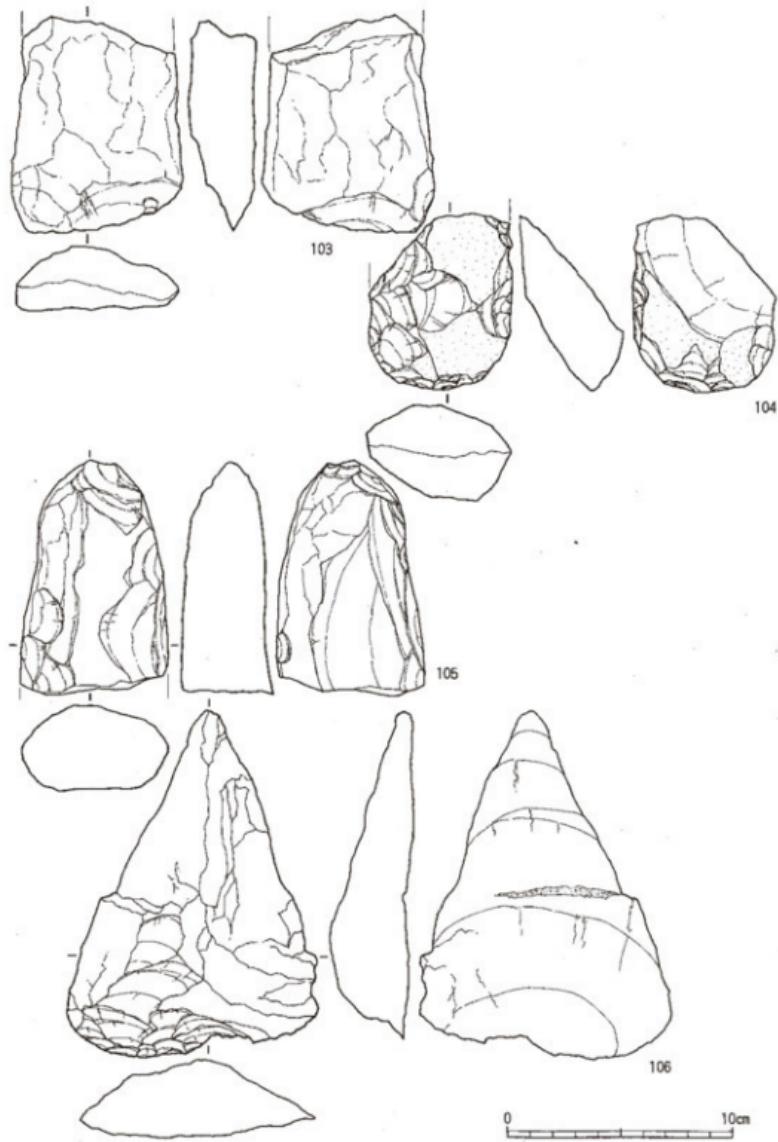
5トレンチから北へ約80mの位置に設定し、約40cm掘り下げた。畑の表面には土器等の散布が認められたが、包含層はすでに削平を受け、表層の下は石灰岩となる。遺構も検出されなかった。

23トレンチ

現況は荒地で、19トレンチから南東へ約15mの位置に2×4mの大きさで設定した。約90cm掘り下げたが、遺構・遺物とも検出されなかった。



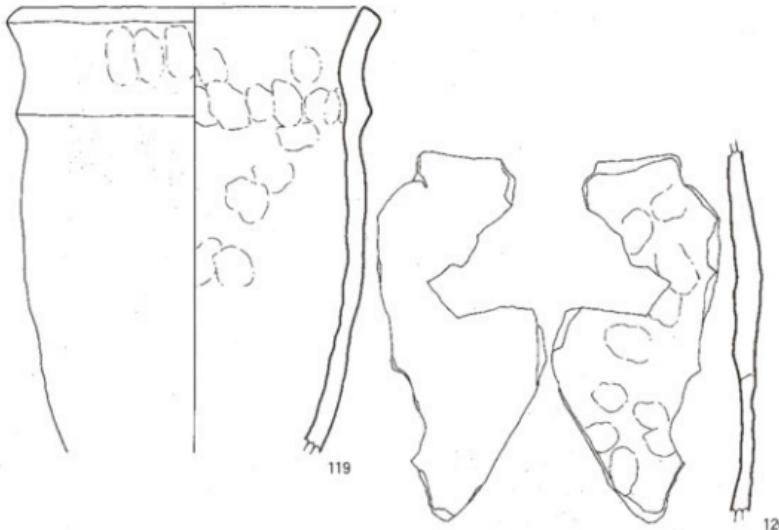
第19図 2号住居跡内出土遺物(1)



第20図 2号住居跡内出土遺物 (2)



第21図 4号住居跡内出土遺物(1)



119

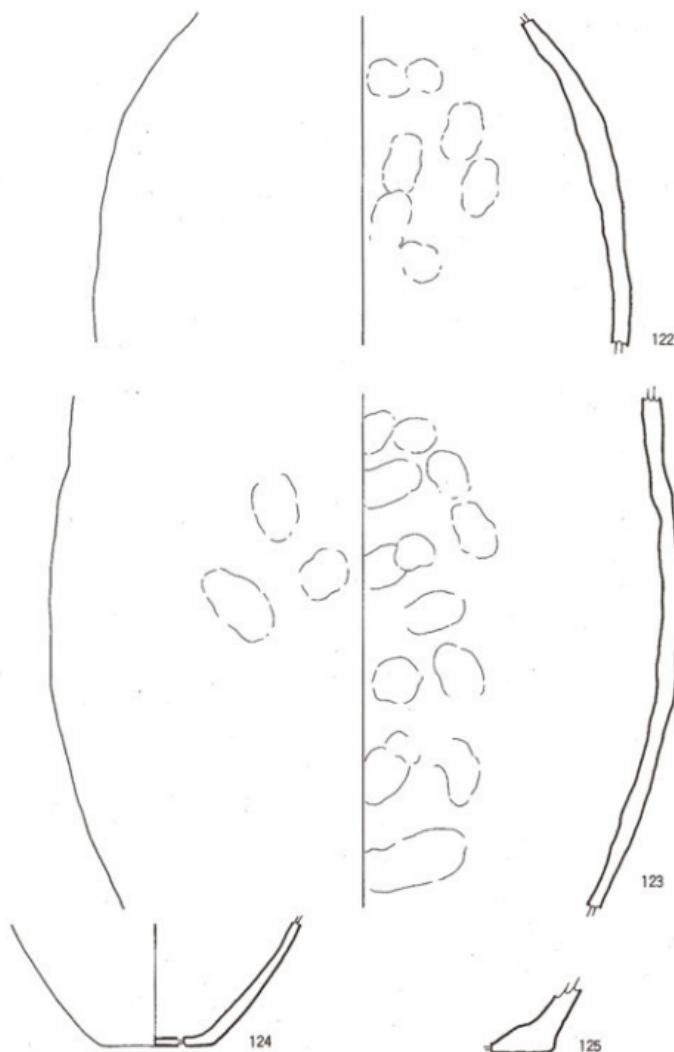
120

121

0

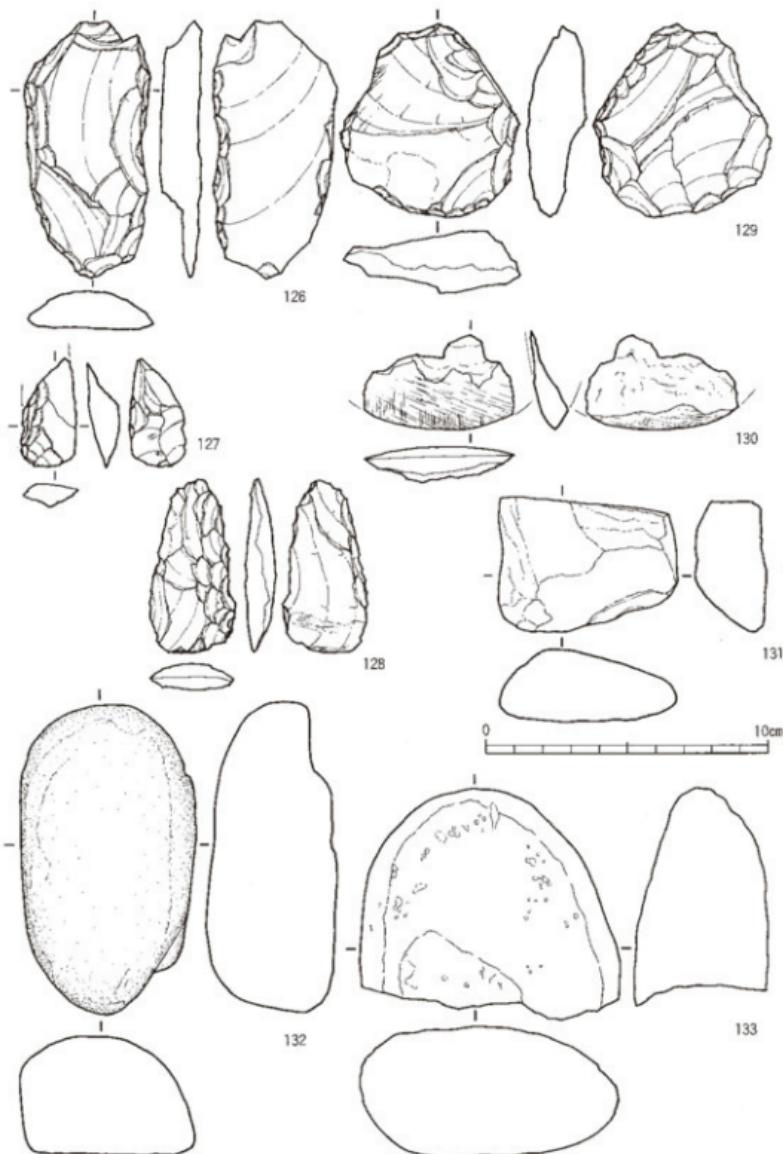
10cm

第22図 4号住居跡内出土遺物(2)

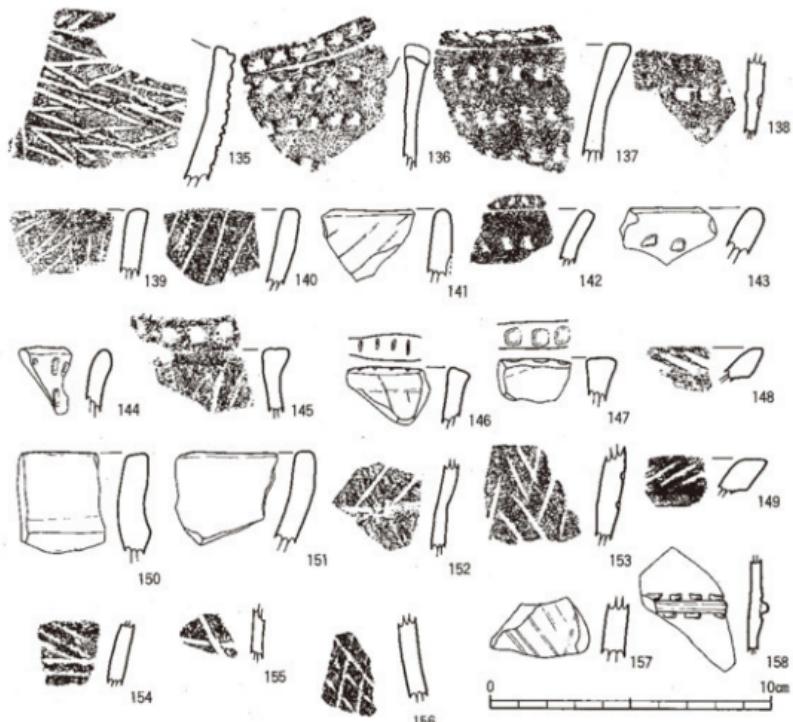
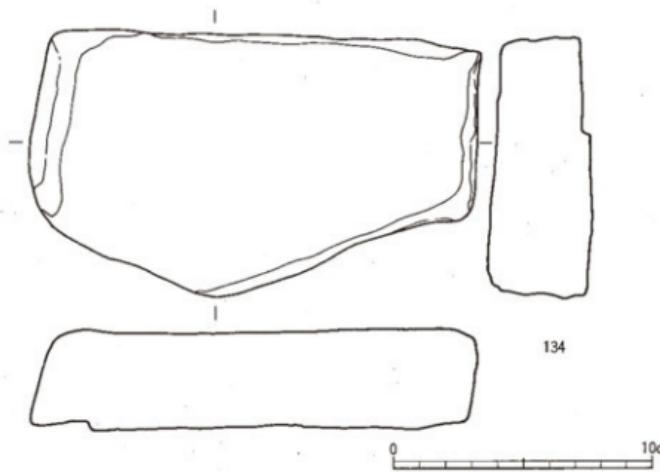


0 10cm

第23図 4号住居跡内出土遺物 (3)



第24図 4号住居跡内出土遺物(4)



第25図 4号住居跡・16トレンチ出土遺物

第6章 まとめ

拡張した16Tからは5基の住居跡を検出した。3号住居跡を除いてはお互いに重複している。各住居跡はほぼ床面だけを残し、その上は削平されている状態で、その切り合い関係は明確に断定できないが、時間的には古い順に5号→4号→2号→1号という関係が推定される。基本的には5基の住居跡は隅丸方形となり、1号住居跡は張り出しを持つ。

沖永良部島において住居跡の検出は本遺跡が住吉貝塚について2例目である。住吉貝塚は知名町住吉兼久に所在し、1957年に調査が実施され、宇宿上層式の時期に比定される石囲いの住居跡を検出している。本遺跡から住吉貝塚までは直線距離にして約2,000mを測る。立地条件としては、住吉貝塚及び本遺跡とも海を望める西海岸に面し、全体的に海岸に向かう緩やかな傾斜地である。住吉貝塚の住居跡が石囲いであるのに対して本遺跡の住居跡は石で囲った痕跡や壁際の掘り込み等は認められない。両者の住居跡の形態には違いがあり、また本遺跡の住居跡内から宇宿上層式土器が出土しないことから時期的にも両者には差があると思われる。また、本遺跡の住居跡の類例を求めるならば、1986年に調査を行った喜界町のハンタ遺跡の住居跡があり、6号遺構が面縄西洞式期に、7号遺構が喜念I式期に位置付けられ、形態的には本遺跡の住居跡とはほぼ同時期と思われる。

住居跡内出土遺物に関しては細心の注意を払い取り上げたが、前述したように検出した住居跡は地表面から非常に浅く、ほぼ床面だけの状況であったため、遺物の移動や混入は十分考えられるところである。したがって、各住居跡毎の時期について述べることは難しく、全体的に住居跡内出土土器を考えてみたい。1号住居跡内出土の77, 80, 82は嘉徳II式土器と思われる。85は、仲原式と呼ばれる土器である。2号住居内出土の92, 93, 96, 97, 98は嘉徳II式土器、94, 99は伊波式土器か萩堂式土器と考えられる。95については、口縁端部が肥厚し、平口縁であり、单範による施文であることから大山式土器との関連性を窺わせる。4号住居跡内出土土器の108は面縄西洞式土器であり、107は面縄西洞式土器か喜念I式土器かと思われる。112については嘉徳式土器、もしくはかすかに盛り上がった帯状の凸帯に凹点が連続することから面縄西洞式土器の関連性も考えられる。118・121・122は無文の壺形土器で時期的には萩堂式以降が考えられる。また、宇宿上層式土器が住居跡内から出土しなかった。このように、住居跡内出土土器は、嘉徳II式から喜念I式までの範囲に収まる。面縄東洞式土器が市来式を伴うこと前提とすると、面縄東洞式・嘉徳I式・嘉徳II式という流れの中で上限は縄文時代後期に位置付けたい。しかも、嘉徳II式でも文様構成の規格性を欠いていることから嘉徳II式の終末としたい。また、下限については喜念I式土器が近年南西諸島の調査結果から縄文晩期として扱われていることからここでもこれに準じたい。

上記以外の土器については、25・26・48-52・69・135・139・140・145が嘉徳II式土器、54・55は凸帶上の凹点から面縄西洞式土器、148・149は口縁部肥厚帯に文様を施すことから面縄西洞式土器との関連を窺わせ、1・27・158は喜念I式土器と考えられる。無文土器のうち

2・9・28～32・150は仲原式もしくは凸帯文土器と呼ばれるものである。14・17・33・40・61は宇宿上層式土器である。18・19は移入された壺形の弥生式土器である。遺跡の時期については、上限は縄文時代後期、下限については住居跡の時代より下がり、弥生時代と思われる。

最後に、沖縄の土器との関連について述べる。64・70・95・136・137・138・142については伊波式系統の土器との関連が考えられる土器である。64は、器形的には伊波・萩堂式に後続する大山式土器に近いが文様的には伊波式土器の三段構成の文様のうち上段を省略した二段構成のものに近い。70は器形的には伊波式・萩堂式土器に近いが、文様構成が風化のため詳細は不明である。95は、前述のとおり大山式との関連を窺わせる。136は口縁端部が肥厚し波状口縁となり、137・138・142は平口縁である。いずれも単籠による横捺刻文を施すもので、器形的には異なる点もあるが文様は大山式との関連を窺わせる。94・99のように伊波式・萩堂式土器も出土していることから、64以下の土器は伊波式系統の流れの中で大山式土器の影響を受けた土器と思われる。

[参考文献]

与論町教育委員会	「上城跡・上城遺跡」	与論町埋蔵文化財発掘調査報告書	1990
高宮廣衛	「沖縄県伊波貝塚」	探訪 縄文遺跡(西日本) 有斐閣	1985
高宮廣衛	「伊波式土器ノ源流」	考古学叢書 吉川弘文館	1988
高宮廣衛	「沖永良部島神野貝塚発掘調査概要」	鹿大考古 2号	1984
沖縄国際大学文学部考古学研究室	「沖永良部神野貝塚発掘調査概報」	沖国大考古第 8 号	1985
上村俊雄・本田道輝	「沖永良部島神野貝塚Cトレンチ発掘調査概要」	鹿大考古 2号	1984
河口貞徳	「日本の古代遺跡 鹿児島」	保育社	1989
高宮廣衛	「南島考古雑録」	南島考古 第11号	1991
喜界町教育委員会	「ハンタ遺跡」	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書	1987
笠利町教育委員会	「宇宿貝塚」	笠利町埋蔵文化財発掘調査報告書	1979
瀬戸内町教育委員会	「嘉徳遺跡」	瀬戸内町埋蔵文化財発掘調査報告書	1974

図 版



大当遺跡近景



大当遺跡作業風景



浜須 A 遺跡近景



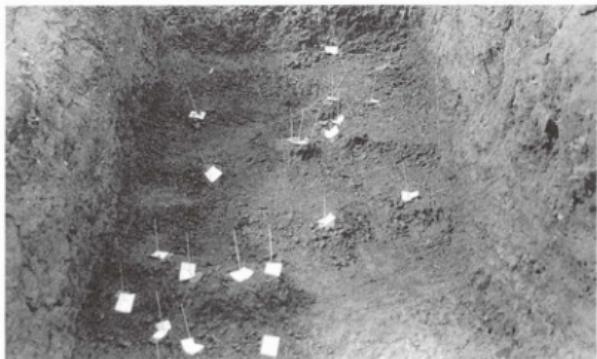
浜須 A 遺跡 5 トレンチ



浜須 B 遺跡近景



浜須 B 遺跡作業風景



6 トレンチ遺物出土状況（浜須B）



16 トレンチ住居跡検出状況（浜須B）



2号住居跡（浜須B）



4号住居跡（浜須B）



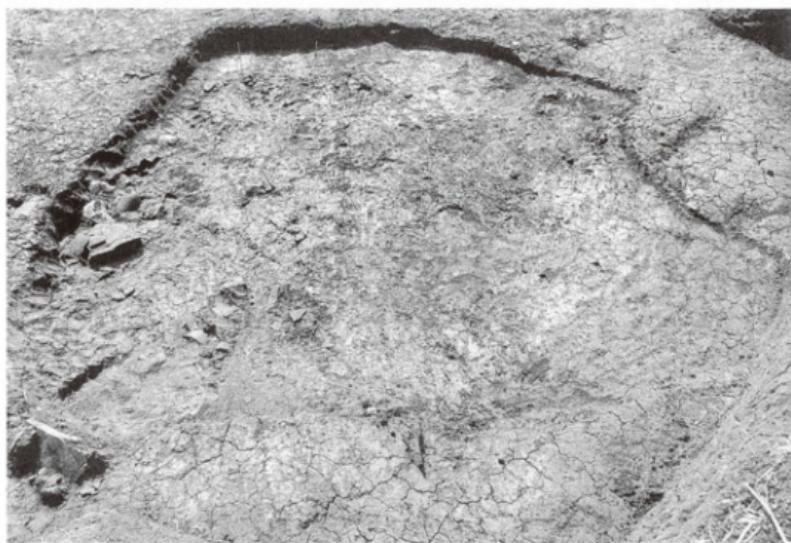
4号住居跡遺物出土状況（浜須B）



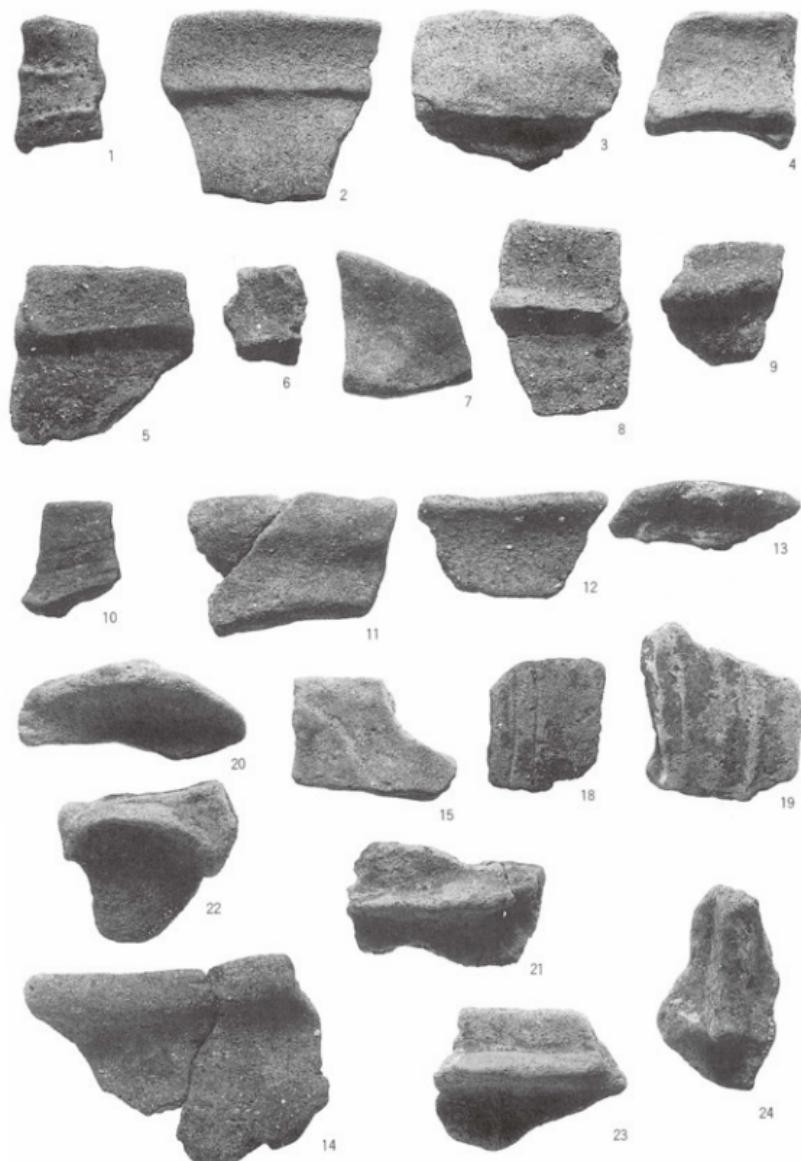
4号住居跡遺物出土状況（浜須B）



1号住居跡遺物出土状況（浜須B）

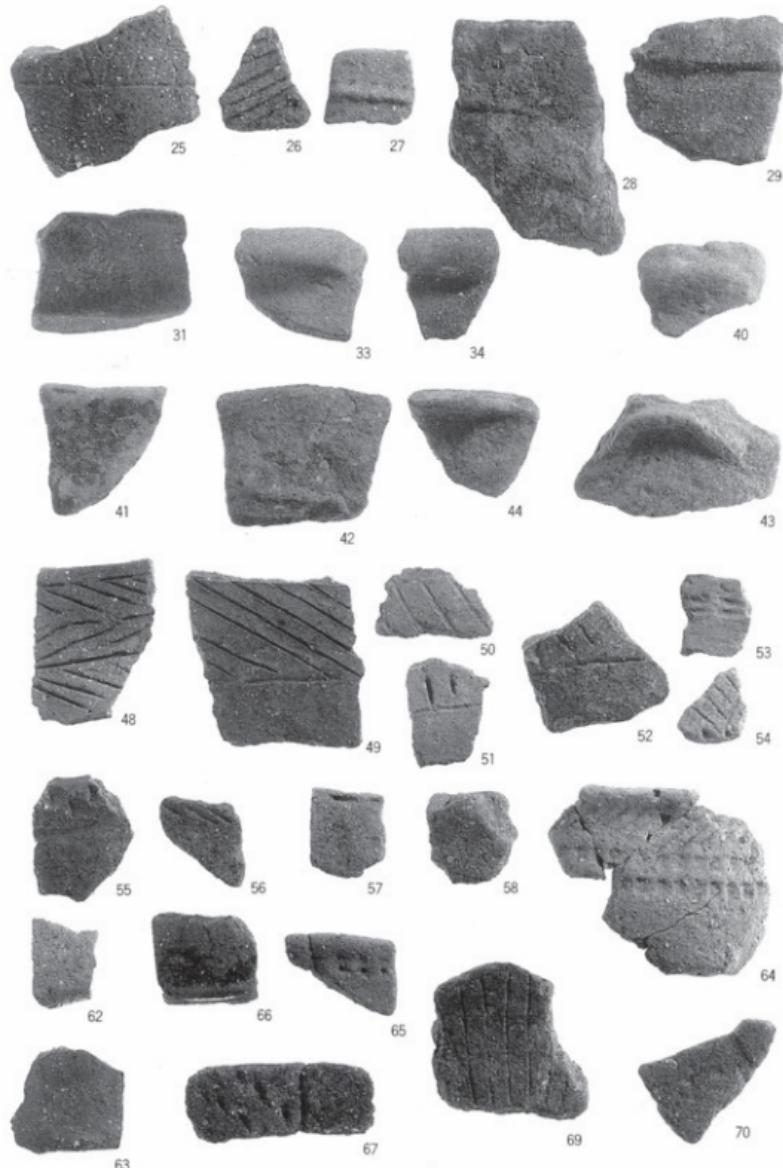


1号住居跡完掘状況（浜須B）



出土遺物(1)

図版 6



出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土 遗 物 (4)



出土遺物 (5)



出土遺物(6)

知名町埋蔵文化財調査報告書(7)

**大当遺跡
浜須A・B遺跡**

発行日 1993年3月31日

発行 知名町教育委員会
〒891-21 鹿児島県大島郡知名町知名307

印刷 有限会社トライ社
〒890 鹿児島市南林寺町12-6
☎ (0992) 26-0815